

## 柿落としの演奏会

志村 良知

雨の日曜日、三月二十四日、綱島に横浜市港北市民文化センターが開館し、その柿落とし演奏会を聴いた。ミズキーホールと名付けられた音楽ホールは定員四百名、その規模に対して天井が非常に高く、良い響きを期待させる。

演奏は大友直人指揮のアーツ室内オーケストラ、二十人編成の弦楽台奏団である。舞台は広く、二十人編成ではまだスペースに余裕があり管弦楽団も大規模でなければ演奏できそう。柿落としとあってか、女性の奏者は全員が独奏の時のような華やかなドレス姿。着飾った女性司会者が登場して曲紹介、指揮者やソリストへのインタビュを交えて進行していく。これも柿落としならではか。

最初の曲は『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』。初めて観客を入れたホールにGの和音が響いてミズキーホールの歴史が始まった。大友の指揮は私の好みよりやや速め、しかし、これが現代のモーツアルトなのであろう。

二曲目はモーツアルトのバイオリン協奏曲一番。その昔十代だった千住真理子の演奏を聴いたことがある。ソロは戸澤采紀、十五歳の時横浜で行われた日本音楽コンクールを完全制覇、ここから一気に世界へ飛躍というのが横浜との縁。現在二十二歳。戸澤の音色は切れ味鋭く、小柄な全身を使い、骨格を通して踵で舞台を響かせる、というあるバイオリニストの言葉を思い出させる演奏。指揮者はソロをあまりコントロールせず、ソロに合わせていく。終わってのインタビュで、リハでの空の時と満員の観客が入った時のホールの響きが変わらない、弾きやすいホールと語る。

三曲目はチャイコフスキーの弦楽セレナーデ。私にはモーツアルトよりも澁刺とした演奏に聞こえた。特に私の好きな中音部を受け持つピアノ四人の熱演には、カーテンコールで指揮者がパートごとに挨拶させたときは他より強く拍手した。

客席の設計もよい。椅子は昔の部下で家業を継ぐため、と入社三年目に退社したブレイクンの名手F君の会社の製品だった。(文中敬称略)

(April 15 2024)